

A Philip or a Gregory, a Harry or a Martin ?

— 初期の詩にみられる若き日の Donne の葛藤 —

岡村 眞 紀 子

John Donne は 1572 年、当時、台頭しつつあった中流商人階級の息子として生まれた。熱心なカトリックの母を持ち、4才にして父をなくした後、母が再婚した二度目の父もまた、熱心なカトリックであったという。John Heywood が祖父、Sir Thomas More が大伯父であった。Donne は 1631 年、世を去るが、そのとき、彼は St. Paul's 大会堂の dean であった。いったい、この間、Donne に何が起こったのか？ 本稿では、その一端を、他者からみた Donne — 肖像画 — と、自己表現による Donne — 詩作品 — を通して、若き日の Donne に焦点を当てて、考えてみたいと思う。

16 世紀から 17 世紀にかけてのイギリスは宗教的に揺れに揺れていた。1534 年、Henry 8 世が「首長令」を出し、ローマ・カトリックから独立して、イギリス国教会を設立した。後を継いだ Edward 6 世はピューリタニズムを、続く Mary はカトリックを、さらに Elizabeth 1 世は再び、イギリス国教会を信奉した。その度に、国王の政策に国民は振り回された。一方、中世的封建制度にみられる教権（ローマ・カトリック）と政権の結び付きが希薄になっていくにつれて、中世的経済体制も崩れ、そういった流れの中で中流商人階級が次第に力をつけていった。中央権力集中の絶対主義体制が強まるなかでも、国王が財政力を強めるために売り出す都市自治権許可証を買うなどして、商業都市とそこに集まる商人達はどんどん力をつけていったのである。Donne が生まれたのは、まさにその時代のその階級であった。このような激動の時代であったとはいえ、敬虔なカトリックの家に生まれた Donne が、St. Paul's 大会堂の dean として世を去ったという謎は、多くの人の興味をそそるものである。

Donne の姿を現在に伝えるいくつかの肖像画がある。そのうち、最も若いときのものと思われるのは William Marshall の手によるエッチングである（図 1）。これは Nicholas Hilliard による肖像画に基づくものといわれ、1591 年の作、Donne 18 才の時の像ということが記されている。この肖像画



図 1

について、同時代人であり、のち詩人の伝記を著した Izaak Walton はこのように述べている。

... of stature moderately tall; of a strait and equally proportioned body , to which all his words and actions gave an unexpressible addition of comeliness, the melancholy and pleasant humour were in his so contempered, that each gave advantage to the other, and made his company one of the delights of mankind.¹⁾

これに続けて Derek Parker はこのように付け加える。

And, one might guess, of womankind.²⁾

確かに、背筋をピンとのばし、真っすぐ前を見すえた若者の像は魅力的である。が、この像の Donne は右手にしっかりと剣を握り、軍服を着ている。1591年という、オックスフォード大学を学位を受けずして中退した直後である。Henry 8世の「忠誠令」により、国教会教義39ヶ条宣誓義務を履行しなければ、学位が授与されなかったからである。その後、Donne はリンカン法学院に入学する。法学院は、当時、中流階級の子弟にとって政治界に入る梯子であった。5年後、Elizabeth 1世の寵臣、Earl of Essex と Sir Walter Raleigh の率いるスペイン領カディス遠征、さらにアゾレス島遠征に参加する Donne を思うと、既にこのときからそれを考えていたことが感じられる。しかし一方、この肖像画の右上に施されたスペイン語のモットー 'Antes Muerto que Mudado (心変わりよりは死を)' には、スペイン—カトリック—に心を残す Donne が見られる。しかも、耳には十字架の耳飾りをつけているのである。これは、既に、切り裂かれた自己の肖像画である。また、この像は Palmijianino の自画像と同様、凸面鏡の肖像画になっている³⁾。ただ違うところは、Palmijianino の自画像では右手が何かを掴もうとするかのように大きく前に出たように描かれるのに対し、Donne では、右手がしっかりと剣を握って手前に引き気味に描かれていることである。平面には描ききれない歪んだ肖像、イギリスの国王とスペインのカトリックに共に惹かれる心、聖と政が、強固な中世的つながりを失っていくなかで、その2極に揺れる Donne の内面が表された肖像画だということができよう。Walton や Parker が言うように、「男にも女にももてる時代の子」、というのは筆者には読み取れないが、'melancholy' と 'pleasant humour' を共に秘めているのは、その像の描き方から感じられる。Walton が、1635年の *Poems* の扉に使ったこの肖像画に付した言葉が、1640年の詩人の伝記の著者らしく、Donne の生涯におけるこの肖像画の位置をよく表している。

This was for youth, strength, mirth, and wit that time
Most count their golden age; but t'was not thine.
Thine was thy later yeares, so much refind

A Philip or a Gregory, a Harry or a Martin ?

From youths drosse, mirth, & wit; as this pure mind
Thought (like the Angels) nothing but the praise
Of thy Creator, in those last , best dayes.

Witnes this booke, (thy embleme) which begins
With love; but endes, with sighes, & teares for sins.⁴⁾

次によく知られている肖像画は、1595年に描かれたと思われるもので(図2)、名もない画家によって描かれたとされている。Parkerは、“Donne in the pose of a melancholy lover”⁵⁾と称している。肖像の上にドーム状に書き込まれた文字は全ては定かに読み取れないが、‘ILLUMINA’、‘DOMINA’の言葉が読み取れ、ポーズであるとしても、単に‘lover’としてのDonneではなく、神への心のあり方を追求するDonneであると思われる。Rembrandtの絵のように、闇の中に光をあてて描いた肖像画は、見る者の目を必然的にDonneの左手と顔、美しい刺繍とレースをほどこした襟元へと誘う。見る者の目が注がれるDonne自身の瞳は遠くを見つめ、何を見つめるのかを問わせる。‘ILLUMINA’の言葉と、画面の在り様に表されるように、Donneの光と闇、闇の中に光を見ようとするDonneが描かれた肖像画である。



図2

この頃に、DonneはParadoxesやSatyresを書いている。

To affect yea to effect their owne deaths, all living are importun'd. Not by
Narure only which perfects them, but by Art and education which perfects her.

(‘Paradox I’)⁶⁾

人の生は死のためにある。死は生を成就することではなく、自然(ことの本質を)を全うすることである。自分はいま、生き急がねばならない。この世は仮の生で、真の生は神の国にあるのだ、というのではなく、一個の人間として、信仰も含めて、自己の生き方を問いつめ、完全な生を生きんとするとき、それは、完全な死を迎えるということであり、一瞬一瞬の生は完全な死を迎えるためにある。人生を、生きているあいだの時間、と考え、そのゴールである死を完璧なものとしなければならないとする切迫した想いは、その‘Paradox I’の何ともパラドキシカルなタイトルに集約される。⁷⁾

... Or how shall man be free from this, since the first man taught us this?
Except we cannot kill our selves because he kill'd us all.

(‘Paradox I’)

人間は原罪を犯した以上、その罰として、死を神から与えられた以上、完璧な死を人間の営みとしてなすことはできない。Donneの死生観はこの絶望感の上に成り立っていることも見逃してはならない。死によって生を完成しようとする生き方は、死の床にあって自ら死装束に身をつつみ、肖像画を描かせて死ぬことによって全うされる。Donneは、そのように自分の生を自分で創っている詩人であった。しかしそのためには、すさまじい内面の葛藤を経験せねばならなかった。

Kind pittie chokes my spleene; brave scorn forbids
Those tears to issue which swell my eye-lids;
I must not laugh, nor weepe sinnes, and be wise,

...

(‘Satyre III’ ll. 1-3)⁸⁾

‘Satyre III’の初めの3行である。罪に対し、哀れみを抱き、嘲弄を感じたからといって泣いたり笑ったりするわけではない。哀れみが涙を、嘲弄が笑いを誘うのではなく、その逆であるところが、そもそもDonneらしくパラドキシカルであるが、ここではそれすらない。それすら自らに禁じている。罪に対してなすべきことは、「賢明であること (be wise)」である。何より、「賢明であること」をたいせつにするのは、いかにもDonneらしいし、この時代らしい。では、ここでいう「罪 (sinnes)」とは何なのであろうか。‘Know thy foes:’ (l. 33) というときの「敵 (foes)」も、「罪 (sinnes)」とともに複数であることから、Donneが向き合っているものは一つでないことが判る。Milgateはそれを‘the foule Devil (ll. 33-35)’, ‘the world (ll. 36-39)’, そして‘last, Flesh (ll. 39-42)’だとする⁹⁾。君の日々の営みはただ悪魔を喜ばせる結果になっているだけ。その揚句、世の中はただ腐敗するのみ。にもかかわらず、君はその世間にしがみつく。まるで成り下がり果てた娼婦を愛するように。娼婦を愛するのは快樂のためだけであるように、君は肉の快樂に身を任す。

Know thy foes: The foule Devill, whom thou
Striv’st to please, for hate, not love, would allow
Thee faine, his whole Realme to be quit; and as,
The worlds all parts wither away and passe,
So the worlds selfe, thy other lov’d foe, is

A Philip or a Gregory, a Harry or a Martin ?

In her decrepit wayne, and thou loving this,
Dost love a wither'd and worne strumpet; last,
Flesh (it selfes death) and joyes which flesh can taste,
Thou lov'st; and thy faire goodly soule, which doth
Give this flesh power to taste joy, thou dost loath.

(‘Satyre III’ ll. 33-42)

初めに述べたように、Donneの生家はカトリックを信奉していた。母方の祖父 John Heywood はカトリック故に Elizabeth 1 世から迫害され、ベルギーに亡命する。その兄は処刑され、叔父、叔母もそれぞれ亡命先で変死する。大伯父 Sir Thomas More が Henry 8 世の国教会創立に反対して処刑されたのは周知のとおりだが、Donne 自身の弟 Henry も、カトリック密僧をかくまったかどで逮捕され、拷問にかけられた揚げ句、獄中でペストにかかって死ぬ。あるいは死の刑としてのペスト流行の地の牢獄への移し替えであったとも言われる。マナクルズ (manacles) (吊下げの刑) の導入者として悪名の高い Richard Topcliff を旗頭にしたカトリック教徒の迫害はすさまじいものであったらしい。このカトリックとイギリス国教会との確執に、Donne は信仰の何たるかを問うたにちがいない。それでもなお、彼はイギリス宮廷に地位を求めた。見下げ果てた娼婦を愛するように。それは、ただ肉の快樂のために愛するのと同様、出世するためだけに Elizabeth 1 世に取り入ったのであった。とはいえ、Elizabeth 1 世の寵臣 Earl of Essex と Sir Walter Raleigh 率いるスペイン遠征にでかけていったのは、出世欲からのみならず、当時、海洋へ乗り出していったイギリスの世界進出の夢、未知の世界を知ろうとする夢を共にしたからでもあったと言えないであろうか。

スペイン遠征の後、Sir Thomas Egerton の秘書の地位を Donne は得る。しかも、Egerton 自身もまたカトリックからの転向を経験した身であった。Donne の前途は洋々たるもののように見えたが、やがて、Egerton の姪、Ann More と恋に落ち、秘密結婚したことから、その職を失うことになる。‘Satyre III’ を書いたのはスペイン遠征の前後のようであるが、その頃の Donne はこのように、俗世での出世にも、女性との恋愛にもと、「生」に心を傾けていたのである。その全てを自ら ‘foes’ と呼んで否定しているのである。ここまで見てくると、この詩の中で ‘thou’ と呼びかけ、風刺しようとしているのが Donne 自身に他ならないことが判ってくる。Donne の Satyre は従来 of 風刺詩ではなく、自嘲の詩なのである。彼は歌う。

Seeke true religion.

(‘Satyre III’ l. 43)

いろいろ ‘foes’ を挙げつらったが、結局、一番問題なのは真の信仰なのである。カトリック、カルヴィン派、イギリス国教会、分離派、エラストス派と様々な会派があるが (ll. 43-69)¹⁰⁾、その

中で真に正しいものを一つ、それも一つだけ選び取らなければならない。これは Donne にとって、困難な、しかし切実な問題なのである。

... but unmoved thou
Of force must one , and forc'd but one allow;
And the right; . . .

(‘Satyre III’ ll. 69-71)

Donne 自身言うように、正しいものとそうでないものとは紙一重なのである。そして絶対的に正しいものは少ない、上にみたように (ll. 43-69)。

Foole and wretch, wilt thou let thy Soule be ty'd
To mans lawes, by which she shall not be try'd
At the last day? Will it then boot thee
To say a Philip, or a Gregory,
A Harry, or a Martin taught thee this?

(‘Satyre III’ ll. 93-97)

スペインのカトリック信奉者の王 Philip, ローマ教皇 Gregory 3 世, イギリス国教会創立の王 Henry 8 世, そしてプロテスタントの Martin Luther。誰の言葉も、結局は人の言葉であって、神の言葉ではない。Donne の求めているのは真の真理であるのに。人の言葉、人の心などは変わる。人には絶対の力などない。限界があるのだ。人はそれを知らなければならない。まして人の心が求め、築き上げていく権力などというものは水の流れと同じ。源では穏やかでも、山や渓谷を流れ下るにつれ、激しい流れに曝され、そして大きな海へと流れ込めば元の黙阿弥、無に帰してしまうのだから。人の得た権力の虚しさを歌うこの条りは Donne らしい生彩を放っている。

As streames are, Power is; those blest flowers that dwell
At the rough streames calme head, thrive and prove well,
But having left their roots, and themselves given
To the streames tyrannous rage, alas, are driven
Through mills, and rockes, and woods, 'and at last, almost
Consum'd in going, in the sea are lost:

(‘Satyre III’ ll. 103-108)

‘As Streams are, Power is;’ と定義しておいて、セミコロンの後 ‘those *blést flōwèrs* thāt

A Philip or a Gregory, a Harry or a Martin ?

dwéll/Àt thè *róugh stréamès cálmè héad, thríve ànd próve wéll,* と、強拍でたたみかけてどつと水を流し、Tò thè *stréamès týrànnòus ráge, àlás àre dríven/Thróugh mílls, ànd róckes, ànd wòods,* と、もっと強い権力に巻き込まれたところで、諦めのリズムへと戻し、*“ànd àt lást, àlmóst/Cònsúm’d ìn góing, ìn thè séa àre lóst:*’ (アクセント記号とイタリックは筆者による) と、弱拍を多くして、虚しく海に溶け込ませていく。長母音を並べてスピードを落しているところも効果的である。

川の流れの比喩は Donne の好む比喩だが、水のしぶきを感じさせ、音まで聞こえてくるような条りである。だから——神より人の権力を選んだからとて、何の意味もない。110 行にわたるこの詩の締めくくりは何とも虚しい。‘So [sou]’, ‘soules [soulz]’ というよく似た音の 2 語の間に ‘perish’ をおいて、今にも「人の魂 (soules)」が消えてしまいそうな虚しさを漂わせている。言い換えれば、「神を求めよ」と自分に語りかける確信に満ちた言葉ともとれるが、この二極同居は Donne そのものに他ならない。実際、Donne はこの詩において、求めるべき真理の存在を明言しているのだ。

On a huge hill,

Cragged, and steep, Truth stands, and hee that will
Reach her, about must, and about must goe;
And what th’hills suddennes resists, winne so;
Yet strive so, that before age, deaths twilight,
Thy Soule rest, for none can worke in that night.

(‘Satyre III’ ll. 79-84)

真理は必ずある。しかし、そこに辿り着くには高い山に登るように険しい斜面を何とか克服し、巡り巡って回り道をしながら登らねばならない。そうして登れば必ず辿りつける。が、長い道りである。しかも人の生には限りがある。生は死によって終るのだから¹¹⁾。だから、この険しい道、遠い回り道を、今、行かねばならない。一見、心多く、回り道ばかりしている Donne だが、そうしながら誠心誠意真理を求めている Donne の姿が浮かび上がってくる。しかも、限られた時間の中で自己の生を完成しようと焦り、その生もつまりは行きつく先は無なのだ、という虚しさにとらわれている Donne の姿も。

What are wee then? How little more alas
Is man now, then before he was? he was
Nothing; for us, wee are for nothing fit;

(‘The Calme’ ll. 51-3)¹²⁾

世の中に地位を求め、自己のアイデンティティをそこに求めても、そんなものは頼りにならない。変わるものだから。と言いつつ、なお、地位を求め、手にいれた Donne ではあったが、宮廷社会の側に身をおいてみると、なお一層、今まで以上に、その腐敗ぶり、虚しさが見えてくる。

O Age of rusty iron! Some better wit
 Call it some worse name, if ought equall it;
 Th'iron Age *that* was, when justice was sold; now
 Injustice is sold dearer farre.

(‘Satyre V’ ll. 35-38)

人の世が、黄金時代から、銀、銅、鉄の時代へと墮落してきた、とするペシミスティックなギリシャ哲学の世界観を下敷にして、「鉄の時代」どころか「錆びた鉄の時代」はまだ良かった、同じお金が動くのも不正のために動くのが今のイギリスだ、と。現代にも通じるような話である。その実態を国王 Elizabeth 1 世は知ってか知らずか……。‘Greatest and fairest Empresse, know you this?/Alas, no more then Thames calme head doth know/Whose meades her armes drowne, or whose corne o’rflow:’ (ll. 28-30) の呼びかけを Donne の「体制に侍る下級官吏の周到な発言である。」¹³⁾と原田純氏は言うが、Donne はこういうところで屈折した物言いをする詩人ではない。知って知らぬふりをする、否、知っていたところで問題としない国政のあり方に——政治とはそういうものだと思うからこそ——対する本来の意味での風刺の刃を向けている。国政として改める方向に向かないなら、下級官吏の一人にすぎない自分が乗り出して行こう、という続く言葉とあわせて、痛烈な皮肉なのである。そのためにこそ、官吏としての高いお給金をもらっているのだから、とまで言い切るのだから。国王の心は上（流）から下（流）へと流れ下って行くものなのに、下って行ったところで氾濫を起こすのではどうしようもない。ここでも人の心の動き、働きが、水の流れによせて歌われる。しかも、‘head’ は穏やかなのに ‘armes’ が下流の畑に洪水を起こすというところでは、頭（理性）で求めるものと現実の行動が食い違っている世の中、そして Donne が風刺の対象となり、また、武器 (armes) のもたらす世の混乱もやり玉に挙げられている。

You Sir, whose righteousnes she loves, whom I
 By having leave to serve, am most richly
 For service paid, authoriz’d, now beginne
 To know and weed out this enormous sinne.

(‘Satyre V’ ll. 31-34)

川の流れのように、人の心、営みは気ままなものだ。理性でしかと認識できぬものだ。だからこ

A Philip or a Gregory, a Harry or a Martin ?

そ一つの景観をなし、生き生きとした色彩と音とを提供するのがも知れないが。Donne が全身で求めていった真理も現世での栄達も、そして女性への愛も川の流れるにもてあそばされる。

When I behold a streame, which, from the spring,
Doth with doubtfull melodious murmuring,
Or in a speechlesse slumber, calmly ride
Her wedded channels bosome, and then chide
And bend her browes, and swell if any bough
Do but stoop downe, to kisse her upmost brow:
Yet, if her often gnawing kisses winne
The traiterous banke to gape, and let her in
She rusheth violently, and doth divorce
Her from her native, and her long-kept course,
And rores, and braves it, and in gallant scorne,
In flattering eddies promising retorne,
She flouts the channell, who thenceforth is drie;
Then say I; that is shee, and this am I.
Yet let not thy deepe bitterness beget
Carelesse despaire in mee, for that will whet
My minde to scorne; and Oh, love dull'd with paine
Was ne'r so wise, nor well arm'd as disdain.
Then with new eyes I shall survay thee, 'and spie
Death in thy cheekes, and darknesse in thine eye.

(‘[Recusancy]’ ll. 21-40)¹⁴⁾

約 20 行をかけて、なんと生き生きと、女性との愛の虚しさを語っていることだろう。川の流れるとともに最後に辿り着くのは ‘death’ と ‘darkness’。詩人はさらに続ける。

I shall
As nations do from Rome, from thy love fall.
...
... and when I
Am the Recusant in that resolute state,
What hurts it mee to be 'excommunicate?

(‘[Recusancy]’ ll. 41-46)

愛する女性から離れるのは辛いかも知れないが、愛されない愛なら自らきっぱりと「背教者」となる方が傷つかない。Henry 8世が自国に、というより自分に益なきローマ・カトリックに背を向け、あえて破門されたように。そして、Donne自身も、母が、弟が命をかけてきたカトリックに背を向けた。果して「背教者」となることが傷つかないことなのかどうか——それは、今の（当時の）イギリスを見れば明らかなこと。それを百も承知でDonneはあえて「背教者」となることを選んだ。傷は避けられなくても。どんなに遠回りでも、人は最終目的地である「死」まで限られた時間で行かなければならないのだから。

For even at first lifes Taper is a snuffe.

(‘[Image and Dream]’ l. 24)

生の証である愛を究極まで追いつめていったときも、至るのはやはり死。

Study me then, you who shall lovers bee
At the next world, that is, at the next Spring:
For I am every dead thing,
In whom love wrought new Alchimie.
For his art did expresse
A quintessence even from nothingnesse,
From dull privations, and leane emptinesse:
He ruin'd mee, and I am re-beget
Of absence, darknesse, death; things which are not.

...

But I am by her death, (which word wrongs her)
Of the first nothing, the Elixer grown;

.....

(‘A Nocturnall upon S. Lucies Day,
being the shortest day’ ll. 10-18, 28-29)

「愛は無から第5元素（4元素からできた地上の全てのものを越えたもの）を創り出す」と、これほどの愛を歌いながら、そのトーンはこの上もなく暗い。愛する女が逝ったから暗いだけでなく、愛さなくても愛されなくても、愛すれば愛されればなお一層、人の生は暗い。生を生きる人が死そのものなのだから。

これらの初期の詩作の後、Ann Moreとの秘密結婚を契機



図3

として失職、余儀なくされた妻との別居、そして貧窮の日々がうち続く。その間に書いた多くの Egerton などへの手紙は Donne の拠って立つべきウィットもプライドもかなぐりすてたようなものになっている。

しかし、失意のうちに 'The Progress of the Soul', 'The Anatomy of the World' を世に問うた後の 1616 年に Issac Oliver によって描かれたミニアチュアの肖像画における Donne の目はこの上もなく穏やかである。装身具も、何の飾りもない装い、描画の年と画家のサインだけのシンプルなものである (図 3)。国王の勧めもあって国教会入りしてまもなくの像である。ここからキリストを思わせる 1620 年の dean としての肖像画 (図 4) までは近い。以上、18 才のときの、一見自信に満ちた、それでいてパラドックスを内在した肖像から、闇と光の 22 才の肖像を経て、この静謐な肖像に向かう葛藤をみてきた。常に複数の価値の間に揺れながら、結局、全てに価値を見いだせずに生きる Donne にとっての唯一の価値は

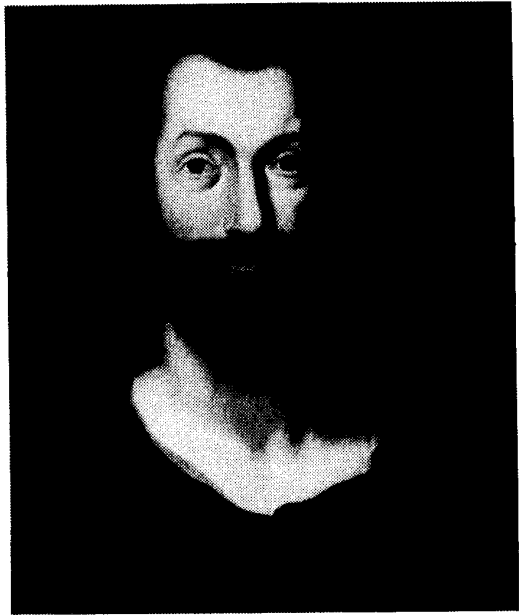


図 4

Wee can dye by it, if not live by love,
And if unfit for tombes or hearse
Our legend bee, it will be fit for verse;
And if no peece of Chronicle wee prove,
We'll build in sonnets pretty roomes;
As well a well wrought urne becomes
The greatest ashes, as halfe-acre tombes,
And by these hymnes, all shall approve
Us *Canoniz'd* for Love.

('The Canonization' ll. 28-36)



図 5

とあるように、詩作にあったのかも知れない。それも「心変わりよりは死を」のあの 18 才のときの死に向かうモットーを通奏低音にして。Donne 自ら死装束を用意し、描かせた 1632 年の *Deaths Duel* の扉に使われた肖像画 (図 5) に至るまで Donne の苦悩は続くことになるが、論を改めて考察することにした。

註

- 1) Derek Parker, *John Donne and his world*, p. 19
- 2) *Loc. cit.*
- 3) 拙稿 「マニエリスムの諸相——イタリアとイギリス, 美術と文学——」(『京都府立大学学術報告』人文第44号) p. 32 参照
- 4) 図1
- 5) Parker, *Op. cit.* p. 4
- 6) Helen Peters (ed.), *Paradoxes and Problems*, p. 1 (Paradoxes の引用はすべてこの版による)
- 7) 'That all things kill themselves'
- 8) W. Milgate (ed.), *The Satires, Epigrams and Verse Letters of John Donne*, p. 10 (Satyres と Verse Letter の引用は全てこの版による)
- 9) *Ibid.* p. 143
- 10) カトリック, カルヴィン派, イギリス国教会, 分離派, エラストス派のそれぞれを代表する Mirreus, Crants, Graius, Phrygius, Graccus を取り挙げ, 結局, そのどれもが, 真の宗教(信仰) たり得ないという
Cf. C. A. Patrides, *The Complete English Poems of John Donne*
- 11) 本稿 p. 3 参照
- 12) アゾレス島への遠征の後, Christopher Brooke にあててしたためた Verse Letter
- 13) 原田純, 『ダン・コンテキスト』, p. 43
- 14) Helen Gardner (ed.), *John Donne, The Elegies and The Songs and Sonnets*, p. 11 (*Elegies* および *Songs and Sonnets* からの引用は全てこの版による)
この *Elegy* は, 1635 年に出版されたときにはタイトルがなかった。本詩集の編者 Helen Gardner 女史が, 最終対句からこの語をとって, タイトルとしてつけた。それを [] に入れることによって示す。

テキスト

- Gardner, Helen (ed.), *John Donne The Elegies and The Songs and Sonnets*, O. U. P., 1965
Milgate, W. (ed.), *The Satires, Epigrams and Verse Letters of John Donne*, O. U. P., 1967
Peters, Helen (ed.), *Paradoxes and Problems*, O. U. P., 1980
Craik, T. W. and R. J. (ed.), *John Donne, Selected Poetry and Prose (Methuen English Texts)*, London: Methuen, 1986
Grierson, H. J. C. (ed.), *The Poems of John Donne (Oxford English Texts) (2 vols.)*, O. U. P. 1912
Patrides, C. A. (ed.), *The Complete English Poems of John Donne (Everyman Library)*, London: Dent, 1985
Smith, A. J. (ed.), *John Donne, The Complete English Poems*, London: Allen Lane, 1971

参考文献

- Parker, Derek, *John Donne and his world*, London: Thames and Hudson, 1975
Bald, R. C., *John Donne, A Life*, O. U. P., 1970
Carey, John, *John Donne, Life, Mind & Art*, London: Faber and Faber, 1981
Gosse, Edmund, *The Life and Letters of John Donne Dean of St. Paul's (vol.1)*, Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1959

A Philip or a Gregory, a Harry or a Martin ?

Walton, Izaak, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson*, (*The World's Classics*), O. U. P., 1927

Docherty, Thomas, *John Donne Undone*, London: Methuen, 1986

カーモード・フランク (新井明訳), 『ダン』(英文学ハンドブック — 「作家と作品シリーズ」), 東京: 研究社出版, 1971

原田純, 『ダン・コンテキスト』東京: 研究社出版, 1991

(1993年8月12日受理)

(おかむら まきこ 女子短期大学部教授)